

殿村の大神宮さん（下氏家町）

下氏家の殿村の南のはずれに、伊勢神宮にゆかりがあると言われている大神宮さんのお堂があります。

今は畑の中の草むらにぽつんと、お堂だけがさみしく残っているだけです。昔は大きな杉の木と松の木が三尺はなれて一本ずつ生えており、その間に大神宮山があったそうです。

石で造られた大神宮さんは初めは御堂がなく、雨や風に当たったり、特に寒い冬にははじめてひびわれができたりのりで、村の人たちは、「これでは大神宮さんがかわいそうです。もったいない。」

と言って、大神宮さんを囲むお堂を作りました。大神宮さんの敷地は、五角形をしていて、三十坪位の広さがあります。

昔、村の人たちは祭や正月にはお参りをして、五穀豊饒を祈りました。殿村の子どもたちは、この広場を遊び場にしていました。

学校から帰ると、

「大神宮さんへ言って遊んでこよう。」

と、みんな我先にと集まってきて、いろんなことをして遊びました。

広場には子どもたちみんなで作った形ばかりのすももの土俵がありました。そこで男の子たちはすももをとって遊んだそうです。

小さな子どもたちは、時々大きい兄ちゃんたち、

「すもものに勝ったもんには、ほうびに色紙をやるぞ。」

と、一枚か二枚の色紙をほうびにもらうのが、とってもうれしかったそうです。

大きな松の木は、昭和の初めごろ、大神宮さんの南側に田の用水をつくるとき掘られた池のわく

にするために切られました。でも、その用水は水が出ないことが分かって、後にうめられてしまいました。

もう一本の杉の木は、大人二人でやっとかかえられる程の大きな木で、高さ十二メートル位のところから、四本の枝に分かれており、その十二メートルの中間が、大きな空洞になっていました。そこに鉢が巢を作ったり、こうもりが住みついたりしたそうです。

杉の木のとっぺんはとても高く、枝はうっそうとおい茂っていました。

「あの杉の木のとっぺんには、天狗さまが赤いつるべをたらしござっしやるんじやぞ。」

と言う人もあって、夜はそこを通るのがこわかったそうです。その大きな杉の木も、近年の台風で枝が折れ、危ないので切り倒されてしまいました。が、今も切り株は残っています。

大神宮さんの横に、「そっはっどん」と、みんな

なが呼んでいる惣八さんという家がありました。惣八さんは村の祭りや正月にはいつも、御神燈を二つ上げ、御神酒や御供物をして、大神宮さんのお守りをしていました。でも、惣八さんが北海道へ移住されたので、その後は、西野喜三右衛門さんがお守りをされています。

